

バセドウ病の長期経過中に再燃し、活動性に一致した SOL 疑い所見を認めた一例

◎中野 正祥¹⁾

兵庫医科大学医学部 臨床検査医学講座¹⁾

【症例】40歳代女性

【現病歴】8年前にバセドウ病診断となりチアマゾール (MMI)にて良好にコントロールできていたが定期検査においてFT4高値となって精査加療目的で当院を紹介受診。

【来院時現症】脈拍:75bpm、血圧:129/67mmHg、甲状腺腫大/圧痛なし、下腿浮腫なし、心音異常なし

【血液検査結果】AST:30U/L, ALT:38U/L, γ -GT:37U/L, Cre:0.56mg/dL, UN:12mg/dL, Hb:14.8 g/dL, Plt:28.4万/ μ L, WBC:8300 / μ L, TSH:0.015 μ IU/mL, FT3:6.63 pg/mL, FT4:2.48ng/dL, TRAb:7.5IU/L

【経過】当院紹介受診時はMMI 5mg/日を隔日投与で加療中であったが再燃傾向を認めたためMMI 15mg/日投与に増量とした。甲状腺超音波検査を施行したところ辺縁不明瞭な低エコー域を認め、内部に豊富な血流シグナルを伴っていた。MMI増量後に甲状腺ホルモンは低下傾向となり、漸減して約6か月後にMMI 5mg/日まで減量した。その際に超音波検査を再検したところ前述の低エコー域は消失していた。当院初診から約1年後に再びFT3値が増加傾向とな

ったためMMI 10mg/日に増量としたが、その際に施行した超音波検査において再び低エコー域を認めて豊富な内部血流を伴っていた。その後MMIを漸減したが再燃することはなく経過し、超音波検査において認めていた低エコー域は消失した。

【考察】本症例はバセドウ病の長期経過中の再燃で受診となり、MMIにて比較的良好なコントロールが得られた後に再び再燃を認め、この一連の過程において甲状腺機能に一致した血流豊富な低エコー域を認めた一例である。内部血流が豊富で辺縁不整なSOLを疑う所見であるため機能性腫瘍や悪性腫瘍との鑑別が示唆されるものであるが自然に消失した。バセドウ病の甲状腺組織においてはこのようなSOL疑い所見を認めることがあるが非専門機関における鑑別は困難でありしばしば紹介受診となることがあるため、本症例の超音波画像の経時変化を提示する。